

頁

行

一四二 上 一

「十一月の寒い雨の降る日」

[33]

お嬢さんがKと親密になってから、約一ヶ月。

一四二 上 六

「すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえつきているのです。私は急に不愉快になりました。」

なぜ自分の所には火がついていないのだ？

Kへの待遇は特別なのか？ 嫉妬

Kとお嬢さんがどんな接近している事への八つ当たり。

上 二三

「私がKはもう帰ったのかと聞きましたら、奥さんは帰ってまた出たと答えました。その日もKは私より遅れて帰る時間割だったのですから、私はどうしたわけかと思いました。奥さんはおおかた用事でできたのだらうと言っていました。」

Kの行動が気になる。Kはいつたい今何をしているのか？

Kの行動が不可解。なぜ家にいないのだらう？ もしかしたら？

下 四

「初冬の寒さとわびしさとが、私の体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上がりました。私はふとにぎやかなところへ行きたくなったのです。」

「わびしさ」……以前あんなに仲むつまじくいい雰囲気だったお嬢さんが、今はKの方を向いているのか？ 孤独感

家に帰っても、自分を迎えてくれる人がいなかった。（わがままな性格？一人っ子？）

一四三 上 五

「私は子の細帯の上で、はたりとKに出会いました。」

Kのことが気がかりで、歩き回って、偶然Kに出会う。気がかりだけど、顔を合わせたくない相手かもしれない。

上 九

「私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kはちよつとそこまでと言ったざりでした。彼の答えはいつも通りふんという調子でした。」

Kはあまり自分について話さない。

「ふんという調子」……素っ気ない態度。鼻であしらう、馬鹿にするという態度ではない（と思つ）。

上 二五

「Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それがうちのお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。」

「少なからず」……大変。かなり驚いた。（はずである。）

Kが外でお嬢さんといつしよにあっているというのは、今までの懸念を裏付けるようなものである。

家の中でもあのように仲むつまじいのに、外でも会っているという

ことは、二人は自分を避けて会っているのだ。

「お嬢さんだったから」……Kが女の人といるということより

も、お嬢さんが男の人といることに驚いた。

今までお嬢さんが男の人と外にいることはなかった。

お嬢さんを独り占めしたかった。

以前、奥さんがKとお嬢さんを二人つきりにした。Kは特別？

私が帰ってきたと思つたら、お嬢さんがKの所から逃げるように去った。

[32]

「ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には」

[32]

上二七

「お嬢さんは心持ち薄赤い顔をして、」

私に会って、気まづかった。(私が好きだから。)  
Kと会っているところを見られたくなかった。(Kが好きだから。)

私の見間違ひ。お嬢さんがばつが悪そうにしていると勘違いしている。(ばつが悪く感じているはずだという先入観。)

一四三

下九

「私はどこへ行つていいか自分にも分からなくなりました。どこへ行つてもおもしろくないような心持ちがするのです。」

もうお嬢さんとKはくつついてしまったのだという絶望感。何をしても気は紛れない。

下二一

「私ははねの上がるのもかまわずに、ぬかるみの仲をやけにどしどし歩きました。」

自暴自棄。どうにでもなれという気持ち。

先ほどの八つ当たりを自分に行っている。

下二六

「私はKに向かつてお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。」

[34]

まずこのことが気になる。お嬢さんと連れだったかどうかが問題である。

一四四

上二二

「私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。」

しつこくKに質問すると、勘ぐられてしまうかもしれない。  
自分のみつともない(愛にとらわれてしまっている)姿をKに見せたくない。

上三

「しかし食事の時、またお嬢さんに向かつて、同じ問いを掛けたくなくなりました。」

Kの発言とお嬢さんの発言が食い違っていないかどうか確かめた。  
い。  
Kとお嬢さんが自分の分からないように会っているのではないか?

上四

「するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をします。」

私を困らせて楽しんでいる?

私がお嬢さんのことを好きだということを知っていた?

お嬢さんのことを好きだということを隠している素振りを見て楽しんでる?

上四

「そうしてどこへ行つたか当ててみるとしまいに言うのです。」

「Kといっしょにどこへ行つたか当ててみる。」

Kといっしょにいたのをうれしがっている様子である。

私の反応を見て、楽しんでいる様子である。

上六

「そのころの私はまだ癪癪持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。」

以前はお嬢さんが笑つてもいやな顔はしなかった。

この時は、二人の間を勘ぐり、いらいらしていらしているので、ちよつとのことでもかなり気になるのである。

Kは愛にとらわれている人に対して軽蔑のまなざしを投げかける。

【例の笑い方】

「一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいっしょに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。」

[27]

【笑われてもいやな顔をしなかった】

「お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと云ってまた笑い出しました。旅行前時々腹の立った私も、その時だけは愉快な心持ちがしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。」

[31]

上 八	<p>「ところがそこに気のつくのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だったのです。」</p> <p>奥さんは私のお嬢さんに対する態度をよく観察していた？ 私がお嬢さんのことを好きなのを感じていた？</p> <p>「Kはむしろ平気でした。」</p>	<p>「よござんす、さしあげまじょう」[45]</p>
上 一〇	<p>お嬢さんがKと自分は連れだつてどこかへ出かけたような発言をしても平気であった。</p> <p>私がどんな反応を示しているか関心が無い。</p> <p>お嬢さんが自分とつきあっているような発言をして、内心うれしいが、それを表情に出す方法を知らない？</p>	<p>Kは無口で、自分をあまり外に出さない。出せない</p>
下 六	<p>「ほとんど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。」</p> <p>「きつと首を持ち上げたがる」……必ずこの感情が生まれてくる。</p> <p>Kとお嬢さんのことを勘ぐっているから、神経過敏になつてい</p> <p>る。</p> <p>お嬢さんのことをあまりにも思っているから、ちょっとしたこと</p> <p>が気になる。</p>	<p>しかしこれは利己的な愛情である。注ぐことをしないで、受けることを期待している。</p>
下 一五	<p>「奥さんにお嬢さんをくれると明白な談判を開こうかと考えたので</p> <p>す。」</p> <p>今の状態（均衡関係）に決着をつけたい。</p> <p>お嬢さんに対してではなく奥さんに談判を開くのである。</p> <p>お嬢さんに対して、自信がない。（自分を好きではないかも</p> <p>しれない。）</p> <p>お嬢さんのことを奥さんに打診をして、お嬢さんはKのこ</p> <p>とが好きだと分かつたらやめることもできる。</p>	<p>Kの性格とはにてもに つかない。思いこんだら 実行してしまうKに対し て、思っているも、いろ いろなことを考えてしま い、実行に移せない。</p>
上 三	<p>「Kの来ないうちは、他の手に乗るのがいやだという我慢が私を押しさ</p> <p>えて、一歩も動けないようにしていました。」</p> <p>「手に乗る」……相手の仕掛けた罠にはまる。だまされて、人の</p> <p>計略に掛かる。（「二度とその手に乗らないぞ。」）</p> <p>奥さんが私の財産を目当てに娘を結婚させようと考えているので</p> <p>はないかと、想像していたことを示す</p>	<p>【財産目当て】 「私はどういつ拍子かふ と奥さんが、叔父と同じ ような意味で、お嬢さん を私に接近させようと努 めるのではないかと考え 出したのです。」[15]</p>
上 五	<p>「Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKのほうに意があるのではな</p> <p>かるうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。」</p> <p>自分に対する自信のなさ。</p> <p>「Kの来た後」すぐということである。Kとお嬢さんを接近させ</p> <p>たのは私ではないか？</p> <p>自分の愛が成就する（現実のものとなる）かが問題なのである。</p> <p>（授かる愛）</p>	<p>Kの自信（道・学問に 対する）と対照的であ る。</p> <p>Kと私の愛の捉え方の 違い。</p>

上二	<p>「向こうが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女と一緒にになるのはいやなのです。」</p> <p>愛の最終地点を「結婚」と考えている。(実際のな結末)(時代背景もあるか?)</p> <p>心の中で思っているだけでは、満たされないということである。</p>	<p>Kは実際のな方面へ行こうとはしなかった。</p> <p>「男女の相思相愛を前提とする理想的愛を考え、結果としては、それが実現されたはずであったが、」(大修館・指導書)</p>
下三	<p>「つまり私はきわめて高尚な愛の理論家だったのです。」</p> <p>「高尚」……気高くて立派な様。上品で程度の高い様。</p> <p>無理矢理自分のほうにお嬢さんを向かせるというのはよくないことだ。</p> <p>自分のほうに向いてくれなければ、あきらめるしかない。あきらめられる?(強い愛と言えるか?)</p> <p>自分のための愛。</p>	<p>「私はその人に対してほとんど信仰に近い愛を持っていたのです。」(145)</p>
下四	<p>「同時に最も迂遠な愛の實際家だったのです。」</p> <p>「迂遠」……遠回りである様。実際の役に立たない様。</p> <p>心の中で思っているだけで、愛の対象になかなか働きかけられない。</p> <p>「実際の役に立たない」ということは、「愛は受けることによつて、役に立つ」と考えている。</p>	<p>「私はその人に対してほとんど信仰に近い愛を持っていたのです。」(145)</p>
下五	<p>「肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長く一緒にいるうちには時々出てきたのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういうことは許されていないのだという自覚が、そのころの私には強くありました。」</p> <p>結婚は家と家が行うもので、個人の交渉によつて行わない。</p> <p>私は古来の風習にかなりとらわれる人物である。</p> <p>私が告白できなかった言い訳か?お嬢さんに打ち明けるという選択肢も頭の中にあつたはずである。(Kがお嬢さんのほうへ進んでいくという危惧。)</p>	<p>「そんな点になると、学問をした私のほうが、かえつて形式に拘泥するくらいに思われたので。」(145)</p>
下〇	<p>「ことに日本の若い女は、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。」</p> <p>自分が打ち明けても、お嬢さんは本当の気持ちを伝えてくれないのではないか?</p> <p>打ち明けてもお嬢さんが真面目に取り合ってもらえないのなら、言う甲斐がない。</p>	<p>「そんな点になると、学問をした私のほうが、かえつて形式に拘泥するくらいに思われたので。」(145)</p>
下二六	<p>「こんなわけで私はどちらの方面へ向かつても進むことができず立ちずこんでいました。」</p> <p>「どちらの方面」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・奥さんに談判を開く方面。</li> <li>・お嬢さんに直接自分の気持ちを打ち明ける方面。</li> </ul>	<p>「そんな点になると、学問をした私のほうが、かえつて形式に拘泥するくらいに思われたので。」(145)</p>

[35]

「目だけさめて周囲のものはつきり見えるのに、どうしても手足の動かせない場合がありますよ。」

考えが頭の中をぐるぐる巡るが、行動には出せない状態。お嬢さんとKが親密になっていくという状態は把握できるし、このままではいけないという考えは頭にあるが、行動には出せないという状態。

「そのうち年が暮れて春になりました。」

Kとお嬢さんが一緒にいるのを見たのは、十一月中下旬である。約一ヶ月半くらいその時から過ぎていく。もやもやしたままかなりの時間が経ったということになる。いらいらするのをも度を超してくる？

「十一月の寒い雨の降る日のことでした。私は外套を濡らして例のとおり……」 [33]